

# 日本科学者会議 福井支部 ニュース

第9号 2002年3月5日発行

- \*\* 日本科学者会議福井支部
- \*\* 〒910-8507 福井市文京3-9-1
- \*\* 福井大学工学部 小倉久和研究室 気付 Tel 0776-27-8582
- \*\* ogura@nqueen.fuis.fukui-u.ac.jp
- \*\* 郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部
- \*\* ホームページ <http://www.jsa.gr.jp/fukui/> (本部のページ <http://www.jsa.gr.jp/> からたどれます)

## 今号の内容

- 米英による未臨界核実験実施への抗議文 日本科学者会議  
「福井の科学者」87号の内容紹介(山川 修)
- 「独法化問題シンポジウム」(01.12.22)に参加して(森透)
- 寄稿:住んでみて感じたアメリカという国 その4-英語2-(永井二郎)

米国ブッシュ政権は、2月14日に、初めて英国が協同して、未臨界核実験を行いました。これに対して、日本科学者会議は抗議文を出しました。

### < 抗議文 >

米英共同による未臨界核実験に強く抗議する。これは2000年NPT再検討会議における「核兵器廃絶への確かな約束」の精神に反するものであり、核兵器廃絶を願う世界人民に対する挑戦と言わざるを得ない。NPTは核保有国に勝手な行為を許してはいない。あらゆる核実験を止め、自国の核兵器をすみやかに廃絶するよう強く求める。

2002年2月15日 日本科学者会議

福井支部30周年記念 市民講演会・シンポジウムが近づきました

## 21世紀の地域構造と公共交通のありかた

日時 2002年3月16日(土) 13:30~16:50

会場 福井県国際交流会館 2階会議室

車で来場の方は、会館の東側道路(御泉水通り)をはさんで向いの駐車場へお願いします。

シンポジウムの成功のため、是非、多くの方の参加をお願いします。

まわりの方に参加を呼び掛けて下さい。

参加券が入手できない場合は、当日受付でお支払い下さい。

**お願い:** 2002年度会費未納の会員は至急納入下さい(昨年度約1/2の会員が未納)  
過去の会費未納の会員は、分納でも結構ですので、滞納一掃にご協力下さい

福井支部の機関紙「福井の科学者」87号が発行されました。会員各位の手元に届いていると思いますが、編集長の山川氏から87号の論文の紹介記事が寄せられましたので、掲載します。

## 「福井の科学者」87号の内容紹介

### もくじ

巻頭言	福井空港の拡張計画中止を歓迎しながら	小幡谷 洋一
自主研究組織「空気砲グループ」の生い立ちから解散まで		工藤 清
発掘された壺や甕などの考古学資料を電子化して利用するための研究		坪川 武弘, 荻野繁春
考古学研究の支援をめざして		
畜産技術の現状と持続性のある畜産を構築するには		加藤武市
食肉の自給率と食料安保	- 豚編 -	
BNL-E949実験に参加して	ニューヨーク州ロングアイランドでの実験生活	玉川 洋一
聖戦	NHK英語ニュースから見た日米文化	久津木 俊樹
編集後記		

巻頭言は、日本科学者会議福井支部の代表幹事である小幡谷氏にお願いした。小幡谷氏はこの3月で福井大学を退官されるが、「福井空港の拡張計画中止を歓迎しながら」というテーマで、福井支部として長年かかわってきた福井空港の拡張計画反対に関連する運動のことを書いていただいた。福井空港の事実上の拡張中止は昨年決定し、それに関わる昔年の思いと共に、市民運動の原点がそこにあったということを指摘されている。

福井大学工学部の工藤氏には、氏の指導のもとに「空気砲」に興味を持って研究を続けた、大学1, 2, 3年学生の自主研究組織の顛末記を「自主研究組織『空気砲グループ』の生い立ちから解散まで」というテーマでまとめていただいた。空気砲が何であるかは本文を参照していただきたいが、興味をうまく伸ばすことができれば、学部学生でも大学院生レベルの研究が可能であることをこの論文は実証している。

福井高専の坪川氏と荻野氏には、考古学資料をコンピュータデータとして蓄積し、考古学研究にインパクトを与えるの新しい手法の取り組みを「発掘された壺や甕などの考古学資料を電子化して利用するための研究 考古学研究の支援をめざして」という題で紹介していただいた。この研究の発端が雑談から生まれたという話は興味深いし、違う分野を専門として持つ研究者の交流が、各々の研究にもたらすプラスの側面は計り知れないという指摘にはうなずけるものがある。

福井県畜産試験場の加藤氏の論文は、86号の続編である。「畜産技術の現状と持続性のある畜産を構築するには 食肉の自給率と食料安保 - 豚編 -」として、豚肉を題材としているが、論じられているのは副題にあるように、日本の食料安保のことである。今後、世界人口の増加や穀物生産量増加の落ち込みを考えると、日本国民が口にする食料をいかに確保するかを考え、実行することが経済対策や構造改革と同じように急務であることを再認識させられた。

福井大学工学部の玉川氏には、ニューヨーク BNL で行っている実験とそれにまつわる裏話を「BNL-E949実験に参加して ニューヨーク州ロングアイランドでの実験生活」というテーマで書いていただいた。氏の軽快な文章のおかげで、共に実験にかかわるスタッフとのやりとりやニューヨークでの生活がなまなましく想起することができる。ところどころに挿入される逸話も現代アメリカ人の気質が知れて大変興味深い。

福井県立大学経済学部の久津木氏には、氏がコレクションしている NHK 英語ニュースで使われている日本を説明するための英語の言い回しに関する話を「聖戦 NHK 英語ニュースから見た日米文化」というテーマでまとめていただいた。海外に行くことにより日本という国が良くわかるというのは、前の玉川氏の論文でも指摘されているが、日本に関する英語のニュースを調べることにより、日本と英語圏の文化の違いを意識するのは興味深い試みである。

(山川)

福井大学教職員組合の機関紙「ゆきおこし」から、森執行委員長の了解を得て、昨年末に東大農学部で開催された「独法化問題シンポジウム」への参加報告を転載します。

## 「独法化問題シンポジウム」(01.12.22)に参加して

2002.1.7 森透

去る2001年12月22日に東京大学農学部で「国立大学独法化・再編統合問題の現段階 - 現状と展望 - 」が開催され参加しました。主催は8大学教職組(北大・新潟大・千葉大・東京外国語大・東京大・佐賀大・宮崎大・東京農工大)。当日のプログラムは以下の通り。

\* 基調報告「遠山プランの現状とわれわれの課題」(千葉大教職組)

\* 各大学からの報告(北大・新潟大・宮崎大・東京大・佐賀大・愛知教育大・愛媛大)

\* 講演「新自由主義改革としての大学改革」(一橋大学 渡辺治)

この中で、福井大学と同じ状況で地域の医科大学と統合協議を続けている宮崎大学と佐賀大学の組合と連絡がとれたことが大きな収穫でした。宮崎大学の場合は、相手の宮崎医科大学の学長がかなりワンマン体制のようで、統合に対してかなり否定的な評価をしているようでした。これに対して、組合が中心となって「宮大八者連絡会議」を作って統合問題を精力的に議論しているようです。八者連とは、宮大教組、宮大農職組、宮大全学助手会、宮大学生自治会、宮大学生寮役員会、宮大生協、宮大生協労組、日本科学者会議宮崎支部宮大分会の8者です。このような幅広い組織で統合問題を議論していることは非常に重要です。「八者連 大学統合問題通信 NO.3」(2001.12.17)によれば、宮崎大学と宮崎医科大学との統合協議「中間まとめ」についてのコメントが掲載されています。それによれば、両大学の委員による5専門部会で検討した「中間まとめ」に対して、そこでの問題点や課題に対して各学部教授会はもちろん、全教職員と学生に十分な説明をするように指摘しています。ここでの情報公開の要求は当然です。また宮崎医科大学の学長のワンマン体制への批判的コメントも掲載されています。佐賀大学でも佐賀医科大学との統合協議が進められていますが、情報公開は必ずしも充分ではないようです。

福井大学教職員組合としても、今後この2つの大学とも連絡を取り合い、統合問題を民主的・総合的に考えていきたいと考えています。

## 独り言のコラム

### 「平和ボケ」と「競争」

知り合いの大学人が「平和ボケ」ということばを使った。私はこのことばは嫌いだ。「平和」は「戦争」に対することばで、言外に戦争を期待することばだからだ。ところで、その人は、大学でのぬるま湯的状況、非「競争的」環境に慣れてあまり頑張らない状況をさして使っている。彼は学生に対しても使っていた。たしかに、そう言われてもしかたがないところがあるのは事実だろう。研究室にやってくる留学生たちの多くはアグレッシブで大変に頑張るが、彼らと比べると存在感の薄い、非「競争的」日本人学生、頑張らないさめた院生がかなりいる。

競争は文字通りには勝敗・優劣を争うことであるが、研究・教育における「競争」は、むしろ「切磋琢磨」が目的であるはずだ。それぞれがそれぞれの夢をもち、追い求め、あるいは夢を後世に託す、これが教育・研究の競争の目的である。したがって、競争には夢が必要であるし、夢があるから競争が切磋琢磨なのである。しかし、いま持ち込まれつつある「競争」はそうではない。

ところで、国立大学、とりわけ地方の小さな大学はいま騒然である。独法化・大学法人化がルールだけ引かれて全くメドも立たないうちに統合、トップ30、……。すでに大学予算の積算枠組みは大きく変えられて重点配分方式が基本になりつつある。これらの動きの基調は、もう10年も20年も前から何度も繰り返し主張されてきているが、大学における教育・研究への「競争原理」の導入である。競争的環境が「個性の輝く大学」をつくる、というわけである。競争的環境は教員の研究だけではなく、学生や若手教員にはもっと厳しい状況が作られてきている。大学での助手定員が激減し、任期付きが増え、その一方ポストは急増している。ポストは任期付きだから、DCを修了する学生たちは求職も就職後も極めて厳しい競争環境に追い込まれているのである。現在強制されている競争的環境は、実は「夢」を求めての競争ではない。「生き残り」を掛けた競争である。そして「生き残り」は文字どおり頑張らないと滅びるという意味なのだ。頑張れば良くなる、夢に近づくというわけではないのだ。統合しないと廃止する、という脅迫で大学はよくなるのだろうか。頑張らないとホームレスという威しが学生を奮い立たせるのだろうか。本来、教育はもちろん研究も、そして本来あらゆる活動も、今の世代のためだけではなく、続く次の世代、次の次の世代のためなのであるから、夢が必要だ。その教育が生き残り競争の対象となってしまった。生き残りのために研究をしなければならない。「平和ボケ」ということばを使った人は「競争」=「生き残り」を意味していたのだろうか。

(2002/2/1 OG)

前回と同様に、英語の問題について記します。

実際にアメリカで生活してみて強く実感することは、「きれいな英語をしゃべる人は意外に少ない」ということです。ここで「きれいな英語」とは、例えばラジオやテレビの英会話番組で話されている英語や、学校の英会話教材で流される英語、さらにはTOEIC試験のナレーションの英語などのことです。こういった「きれいな英語」についてヒアリング能力を高めることはとても大切なのですが、実際にアメリカで生活してみると「きれいな英語」はめずらしいくらいです。

数多い体験の中から2つ3つ挙げてみます。私の家内が「ものもらい」の治療のため目医者へ行くとき付き添ったのですが、その待合室で私は80歳前後と思われる高齢の男性と隣り合わせになり、30分間ほど会話をしました。この方の英語は、声がハスキーなことと、どこかの訛りが強くて、私にはほとんど聞き取ることができませんでした。しかしどうやら「アメリカの医療保険制度は、低所得者にとっては地獄のようなものだ」という事を言わんとしているようで、なんとか会話らしきものを続けることができました。また別の例として、大学の研究室の同僚に、中東からきた博士研究員の方がおりました。この人の英語はとにかく早口で、少々訛りもあり、何度も会話した仲なのですが、私の理解度は30%くらいしかありませんでした。それでも何とか会話（意志の疎通）は可能でした。また、私と同じ専門分野の著名な教授で、インド出身の方がUCLAにおられます。この先生の学会での講演は、これまた大変な早口で、ほとんど何をしゃべっているのか分からないのですが、何となく内容は想像できます。

今回は結局何が言いたかったかということ、「日本で英会話能力を高める努力をすることは大切だが、それだけでは実際の現場ですぐに通用するとは限らない」ということです。「きれいな英語」はむしろ稀であって、様々なバリエーションの英語が世界に存在しており、たくさん場数をふんで様々な「ふつうの英語」と対峙することで本当の英語コミュニケーション能力が身に付くのではないのでしょうか。ですから、「英会話学校で一生懸命勉強したのに外国で英語が分からなかった」と感じる人は悲観する必要は全くなく、後は場数を踏んでいけば自然と英会話が上達するのではないのでしょうか。

### 福井支部30周年記念

#### 市民講演会・シンポジウムが近づきました

## 21世紀の地域構造と公共交通のありかた

日時 2002年3月16日(土) 13:30~16:50

会場 福井県国際交流会館 2階会議室

参加費 500円

コーディネータ 桜井康宏氏(福井大学工学部)

シンポジスト報告 川上洋司氏(福井大学工学部)

浅沼美忠氏(福井県立大学経済学部)

内田桂嗣氏(ROBAの会会長)

川本義海氏(福井大学工学部)

美濃部雄人氏(福井県都市計画課課長)

車で来場の方は、会館の東側道路(御泉水通り)をはさんで向いの駐車場へお願いします。

参加券は支部幹事が扱います。あるいは、直接、支部事務局へ申し込んで下さい。参加券が入手できない場合は、当日受付でお支払い下さい。

シンポジウムの成功のため、是非、多くの方の参加をお願いします。

まわりの方に参加を呼び掛けて下さい。

